



2004年10月15日 発行

2004年秋号

<第2号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 E-mail: union@h9.dion.ne.jp

## 「お母や〜」

八月八日、お母さんが亡くなりました。

お母さんはずっと病気でねたきりやったね。お母さんに死なれて、さみしくなりました。それに、とっても困りました。ふあんでした。

次の日から、一人じゃ生活できへんから、着替えやハブラシをもって、レスパイトの部屋にとまりました。

それから、ベットや食器や洋服やバッグをがんばって運んでグループホームに引っ越ししました。前の家は退去したから、もうもどれません。さびしいね。でも、がんばらなあかね。

今は友だちと二人で住んでいます。部屋は洋室で、浴室やせんたく場や洗面所があつて、気に入っています。これからは、こゝが私の家やね。せんたくやそうじもせなあかんし、毎日忙しいです。でも、たくさん友達がいるから楽しいねん。

竹村 和子

# ワークス歩<sup>あゆむ</sup>は今

## 彼らの誇り

「ワークス歩」は、一九九八年四月一日に「㈱トス」の工場内に「ワークストス」として開所しました。現在の利用者は、男性八名、女性七名の計十五名、職員二名で、就業時間は午前九時から午後五時までです。昨年七月に「㈱トス」が「サンワ㈱」になりましたが、今まで通り仕事を頂いています。作業は、ハンガーのウレタン掛けや、サイズシール貼り、ハンガー加工などです。企業内という環境の中で、厳しく激しく、一日作業に汗を流しています。

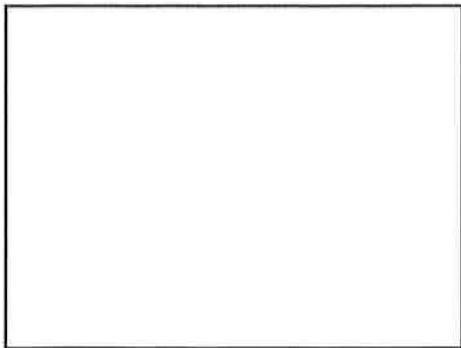
ある朝、早々に出勤した彼が、「歩」の入り口のところをもちてきてください！」彼は目を大きく見開いてそう言った後も目をそらしませんでした。会社から受ける注文は、毎日ぎりぎりいっぱいのもです。五時に仕事を終えられる日は、そう多くありません。なのに彼はまだ足りないと思ふ節があります。前日、彼が仕事をしている作業台に、ある社員さんが来ました。社員さんは時間をかけて箱詰めのコツを教えて

です。肩を落としてグループホームに帰って行った一人のメンバーがいました。彼は結局、その日の夕食に顔を出しませんでした。

彼には長い就労経験があります。終わりのない不安と苛立ちとくやしさの中で、彼は何を感じてきたのでしょうか。自ら奮い立たせながらぎりぎりのところで耐えてきた彼を想像します。彼は会社から任せられた仕事に

くれました。するとその翌日、彼は「もつと注文が欲しい」と訴え、別人のように軽快な動きで皆を引つ張ってみせたのです。きつと彼は社員さんとのやりとりの中で、自分が会社の一員であることを感じたのではないのでしょうか。決して一般就労の扉が近くなかった彼です。その彼が他の誰よりも、会社で働くということを意識している。そう思います。会社からの注文を全て仕上げられなかった日のこと

企業内だからこそ感じるこののできる厳しさ、これを彼らは求めているように思います。結局この日、五分ほどの残業でその大量のハンガーの山はなくなりました。会社の期待に応えたい自分たちを認めてもらいたい―彼らの想いが伝わってきます。



いという気持ちが一倍強い彼女です。社員さんの中にも果敢に入っていて仕事をします。その彼女が、話し合っって決める箱詰め担当を、いつも渡って逃れようとするのです。周りが困っている状況にもすぐに気が付く彼女ですが、その時もまた、見て見ぬふりをするのです。「自分さえ認められればいい」という彼女にとって、全体のことを考えるのは難しいのかもしれない。しかし彼女に、自分は周りから必要とされているのだと感じて欲しい！。

そんな彼女が今日、何も言わずに遅れている箱詰めを手伝いました。彼女もまた、ゆっくりと少しずつ変わろうとしています。

今、彼らは「自分たちが歩を動かす」ということを考え始めています。その中で、「歩にとって必要な自分」をそれぞれが見つけようとしています。そんな中、気になる人がいます。働きたい、認められた

歩に、そして会社に必要とされることは、社会に必要とされること。その緊張の中にある充実感、それが働く人の誇りなのだと思ふ。彼らは言っているように思います。(内田・永綱)

## ユニオンの始まり (二)

親たちの「たたかい」

ワークスユニオンは、志を一つにした四十五名の親(保護者)の力が結集して作り上げられたものです。そのエネルギーはどこから生み出されたのか。それを明らかにするには、彼らを取り巻く状況との長きびしい「たたかい」を書かねばなりません。

「ワークスユニオンはどう

話は十二年前に遡ります。

「して始まったのか」。先の号では、いわばその表舞台を、格好よく整理された言葉で伝えました。しかし、言葉の物ごとも、始まりには、言葉は、親たちの期待に反して、にならないさまじき事情が複雑にからみ合い、それが

瞬間のエネルギーになって噴出するものです。ご他聞にもれず、ワークスユニオンにもそれなりの事情、率直に申せば、親と支援者との激しいせめぎ合いが先ずありまし

た。そしてそれが互いの力に転化して、一つの強固な集団を作り上げたのです。今回はいわばその裏舞台を、あるがままにお伝えしましょう。

それでは――。

できても、もし途中で失敗したら、誰がその後のこの子を守るのか。

これは、よく見られる親と支援者との対立の構図です。子どもの非力を熟知する親は、安全と安定を求めるのに対して、支援者は挑戦と変化を求める。しかし往々にして支援者は理想に走り、先行きの失敗を考慮しない。そしてその失敗の後始末は、支援者ではなく、結局親が引受けることになる。格好よい言葉と並べる支援者の不実を、親は見抜いているのです。そして恐れているのです。

一年が過ぎて、八名の若者が就職しました。そして次々と、毎年十名を超える人たちが施設を巣立って行きまし

た。しかし、それと同じ数ほどの人たちが、実習と就職につまずいていました。勿論、施設長はそんなこと位で手を上げるわけはありません。つまり、彼らを幾度となく施設へ戻して、また会社へ送り出す。その畳みかけるよ

次第に支持を寄せるようになりませんでした。しかし、出来なものはやはり出来ない。そうこうする内に、二つの

難題が、両者に降りかかってきたのです。

**重い障害をもつ人たちの更正施設が、早くから隣に併設されていきました。そして、授産施設の保護者会は、妙な成り行きで、先行の更正施設の後塵を拝していました。**

保護者が施設へ寄せる期待は、当初はともかく、授産施設の先のような展開からかなり差異が生まれていま

した。そこで、授産の親たちは当然のごとく分離を申し出たのですが、出資金の分配等がからんで、事はそう簡単には進まなかつた。更に件の施設長が両方の施設を兼務するに及んで、話が少々込み入ってきたのです。

どうしても独自の保護者会活動を進めたい授産側の親たちは、痺れを切らして、終には保護者全員の署名を集めて、更正側に分離を迫るまでに至りました。

親たちの願いは成就されるのですが、その間に育つた彼らの意識の自覚めと閉結は、親と支援者の溝を埋めるばかりでなく、むしろそれを更なる高みへと押し上げるものでもありました。

**親たちの目覚めと閉結** 拍車をかけるように、彼らの所属する法人が、施設の利用を五年に限る方針を打ち出しました。就職できずに留まる人たちの多くは、その年限に近づいていましたから、親たちは急いで次の場を用意しなければなりません。

一方、支援者たちは、親たちの働きから、就職は人生の一段であり、一過程に過ぎないことを学んでいました。支援の基本となるのは、彼らの人生の総てであり、生活の総てなのだ。支援者たちは、その「総て」に取り組む決意をすでに備えていました。

支援者とのせめぎ合いに始まる親たちの変容は、そのような経緯の中で、ワークスユニオンを生み出す原動力になったのです。(山川)

# 自立への歩み

9月より、「中期自立生活体験」が新しくスタートし、2名の女性が大きな一歩を踏み出しています。

「みんなとご飯を食べてうれしかった。」と満面の笑みで話す彼女。「短期自立生活体験」では、短期参加者のみで食べていた夕食。中期自立生活体験からはグループホームの食堂で、そこで生活をする人達と一緒に食事をすることが喜びとなつたのでしょう。そんな一つの喜び、一つの楽しみが日々の生活の心のエネルギーになつているようです。中期自立生活体験では、二週間の毎日の予定を自分で考えて生活をし、週末の過ごし方については、自分で決めます。「生活」は「自分で作り上げるもの」、自らの生活を作り出す一つの機会として、中期自立生活体験があります。週末は、グループホーム

## 『中期自立生活体験』

で過ごすことも、余暇活動に参加することも、一旦家に帰ることもできません。そんな中、週末は帰らず「ここに残る。」と決めた彼女の目から、『短期』とは異なる『中期』に対する彼女なりの決意と気迫を感じました。職員が想像していた以上に彼女の心の中に芽生えた自立への意欲ははつきりと存在し、成長を続けていたのです。自立とは？一言では言い切れず、答えも一つではないでしょう。

中期を始めた彼女たちの彼女たちによる、彼女たちなりの自立があるに違いありません。その大きな第一歩を今、踏み出しているのです。(牧野)

## 訃報

去る八月八日(日)に、会員の竹村博子様が、ご逝去されました。慎んで、ご冥福をお祈りいたします。

## 職員紹介 「ワークス歩」

援に徹する)が今年の彼女の目標である。

### 永網和久

彼は、今年の春、大学を卒業したばかりの、ユニオン一フレッシュマン。

「相手を思いやる気持ちを大切に仕事をしていきたい。例えば、電車で立っているお年寄りを目の前に、堂々と腰を下ろす人の、その気持ちを許したくない」と話す、心優しい義憤の士。

### 内田陽子

昨年四月、公立校の教職員を自ら辞して、ユニオンへ飛び込んできたはりきり娘。

教育現場での苦悩と挫折を乗り越えて、ひた向きに取り組んだユニオンにおける

一年半は、彼女を大きく成長させたようだ。しかし、「まだまだ私は小娘。」との自戒を持ちつつ仕事に臨んでいますと話す。

これまでの職員主導の「歩」を一転させ、「利用者」が自分たちで運営する事業所の創造(職員は陰からの支

新卒とは思えない落ち着いた物腰で、淡々と仕事をこなし、先輩の内田を立てる。利用者さんだけでなく、一緒に働く企業の社員さんからの評価も上々のようだ。

効率性を優先する縦型社会の企業の中での、若者たちによる「利用者主体の運営の試み」は、始まったばかりである。周りの社会との多少の軋轢はあるだろうが、「利用者たちの成長」と「若者たちの成長」を、共に温かい目で見守りたい。(南石)

## 編集後記

親じき後の本人の問題。それは、障害者支援をするものにとつて永遠の課題かもしれません。

平成十六年八月八日、ワークスユニオン会員の竹村博子さんがご逝去されました。私が最後にお会いしたのは、その二週間前でした。老人の居宅介護事業所からの連絡で訪問した時には、すでに自力で起き上がることが出来ないお体でしたが、精一杯の声を振り絞つて、お声を聞かせて頂きました。「いつもありがとう。」「和子をこれからもお願いいたします。」

今号一頁に書かせて頂いた通り、現在、和子さんはグループホームで元気に暮らしています。時間単位でケアをするタイムケアがはよりの時代ですが、一生を支えるというトータルな支援が置き去りにされていく事に疑問を感じます。ユニオンが、利用者の最後の皆にならねば、と改めて感じました。(荒木)